

特集：多文化共生と向きあう

【シンポジウム】

「多文化共生」と多様性

教育に何ができるのか

シンポジスト

宇都宮 裕章
(静岡大学)

南浦 涼介
(東京学芸大学)

山西 優二
(早稲田大学)

ヤン ジョンヨン
(群馬県立女子大学)

コーディネーター・司会

佐藤 慎司

(プリンストン大学)

本稿は、2016年3月13日に開催された言語文化教育学会第2回年次大会シンポジウム2の記録である。

Copyright © 2016 by Association for Language and Cultural Education

1. 各シンポジスト発表¹

1. 1. 挨拶：佐藤慎司

シンポジストの皆さまにお話いただく前に、本テーマと、私の自己紹介をさせていただきたいと思えます。

今回のテーマはシンポジウム¹に引き続き、多文化共生に向け教育に何ができるのかということに焦点を当てています。初めに、本学会の経緯や今回のシンポジウムや学会のテーマを選んだ経緯などを、

この場を借りてそのお話いたします。

私の専門は、教育人類学という分野ですが、その定義を始めるとすごく長くなってしまいますので、ここでは割愛させていただきますが、私は、随分長い間、人類学、教育人類学、人類学的視点からことばの教育というものをいつも考えて実践しています。

ただ、あまり知られていない学問分野ですから、いつも居場所のないもどかしさというものがありました。2年前に本学会が立ち上がる際に学会設立にかかわる機会を与えていただきました。その際、ことばの教育、文化の教育を考えていくうえで、この学会が多様な分野の方々が集って話し合いができる場となればよいと常に思っておりました。

この学会の参加者は日本語教育関係の人が多いのですが、ほかの外国語、国語、継承語など、様々な

¹ 各シンポジストの発表スライドは、大会 WEB サイトで公開されている。

URL : <http://alce.jp/annual/p2.html#symp2>

² シンポジウム 1 : 「多文化共生」に対する私のとりくみ——多様なジャンル、アプローチのセッションから語る「多文化共生」の未来 (2016年3月12日)。

分野からも参加していただいております。ことばだけでなく、文化を含めた場合には、社会科教育や国際理解教育、異文化間コミュニケーションの方々も含まれるでしょう。

そのため、本学会が立ち上がる際に、考えたことがあります。それは、とにかく最初の1、2年で学会の色ができてしまう前に、ことばの教育を考えると、出来るだけ日本語教育色、ことばの教育色を薄くしたいということでした。

今回も、初日の細川先生のお話とか、三代さんの挨拶にもありましたが、この学会にはことばの教育だけではなく日本語教育の外からも、かなり様々な方に入ってきていただいていると感じています。今後も、様々な分野からより多くの人に入っていただきたいと強く思っています。

今回のテーマは、多文化共生と向きあうというものです。このテーマを考えたのは、おそらく、去年の冬くらいです。ちょうど開催校がこの武蔵野美術大学に決まった時期で、三代さんと古屋さんと3人でどんなテーマにしようかと、早稲田のとある喫茶店で話していました。その頃（今もですが）私はヘイトスピーチとか政治家の失言や暴言とかが非常に気になっておりました。そのようなヘイトスピーチ、失言や暴言があまり反省されることなく許されてしまう社会の中で、他者とのコミュニケーションを目的とすることばの教育が「テニヲハ」とか「漢字」だけをやっていていいのでしょうか。私はすごくもどかしさを感じておりました。そのようなことに関係のあるテーマを組めたらいいなと3人で話をしていたのがきっかけのひとつです。

それ以外にも、私は、外国語教育は、様々な意味でのつながりが外国語を習うことで広がっていくはず、というか、べきだと考えています。しかし外国語教育において、学習言語のみの使用を常に強要した場合には、なんらかの理由でその言語を話せない人を排除してしまっていて、つながりが広くならず

に、逆に狭くなっているのではないかという意識をすごく持っていました。そのような中で、いったいことばって何なんだろうかと考えるようになりました。今回、開催が武蔵野美術大学ですけれど、ことばを広く捉えると、アートとか音楽、演劇のような表現活動も含まれるなあと、そんなことを考えていました。

また、今の社会において、人類学的な視点の一つとして、様々な現状をクリティカルにみていくことは、非常に大切なことだと思っております。しかし、クリティカルな実践、研究をする人の中には、クリティカルに見ない人を上から目線で見下ろすような人たちもいると思います。私は、クリティカルに見る際に大切なことは、これから自分が大切に思うコミュニティや社会をよりよいものにしていきたいという意識だと思います。それがベースにあるべきで、クリティカルに見ることには、愛情が必要じゃないのかとも思っています。それで、宣伝にもなって申し訳ないのですが、この話題についての本を最近ココ出版から出版しました（佐藤、高見、神吉、熊谷、2016）ので、興味がありましたら見ていただけたらと思います（表紙画像をスライドで見せる）。

このシンポジウム2では、多文化共生と向きあう、教育に何ができるのかについて考えます。このシンポジウムは学会の締めくくりでもあります。初めに、皆さんにシンポジストのみなさんのお話を聞いていただいた後、色々ディスカッションの時間を設けています。その時間で、以下のようなことを振り返っていただければと思います。

- ・実際に社会のコミュニティの一員として、自分に一体何ができるのか
- ・どんな教育実践者、研究者になりたいのか
- ・どんな教育実践研究を通して、コミュニティ、社会づくりをめざしていきたいのか

- ・そのためには自分は何をすればいいのか
- ・今実際にしているのか

私もこのシンポジウムの時間の中で、学会の2日間を振り返り、テーマについてもう一度考えていきたいと思っています。今回のテーマは、「多文化共生と多様性——教育に何が出来るのか」です。いろいろなご発表の中に、それぞれの多文化共生の定義がみられました。しかし、このような多文化共生の定義が提示されていなかった場合、みなさんを含めた一般の方々が同じような定義を思い浮かべるわけではないと思います。また、本シンポジウムを通して、みなさんがされている実践ですとか、研究のお話をする中で、多文化共生に対する様々な立ち位置がみえてくるのではないのでしょうか。また、そういったお話をシンポジストの方々からいただければと思っています。

他に定義などしにくいことばに「教育」があるかと思っています。私が調べたものからいくつか取り上げると、例えば能力を引き出すことなのか、よりよく生きることを引き出すためのものなのか、強制の一種、社会の再生産と様々な捉え方があります。また教育の分野も学校教育だけではありません。地域教育、家庭教育、社会教育、生涯教育などいろいろな分野があります。今回はそういったものを全て含んだ広義の意味で教育として捉えていただければと思います。

これまでに、多文化共生と教育に関する、また、ことばの教育に関する議論というのはかなりなされてきました。そして、その議論は様々な学会や特集などでまとめられております。ここではこの中で特に3点に関して確認をしておきたいと思っています。まずは、多文化共生という概念についてです。ひとつは、この共生ということばというのは、上から押し付けられるような強制的な概念、ニュアンスと、地域社会で共に生きるための実際を作っていく努力と

いう横の関係という実践的概念の両方のニュアンスが含まれているのが内実ということをもとめていらっしゃる方もいらっしゃると思います。

次に、共生の概念において、「マジョリティが教えマイノリティが習う」、それから外国人の当事者の視点という発想ですと、「外国人と日本人の境界線をどのように捉えるのか」といったことが問題になってくるかと思っています。それから外国人支援という発想ですと、支援という発想自体の発想の裏には、「困っている、可哀想な外国人」というニュアンスも含まれてきます。この問題についても再考が必要ではないでしょうか。

最後に地域社会における共通言語としての日本語、「やさしい日本語」が必要だという議論もあります。しかし、いったい「やさしい日本語」といったものは、理念なのか、それとも実体なのか、この点も再考する必要があります。

実践を進めていくにあたっては、以下の点を確認する必要があると考えます。

- ・外国人は社会に同化されるべき存在なのか
- ・社会を創るのはいったい誰なのか
- ・社会とは、誰にとっての誰のための誰による社会なのか

それ以外に教育課題に関しては、大きく3点が挙げられます。1つ目は、特に国レベル、政策への提言という視点が欠けているというようなこと。2つ目は、外国にルーツを持つ子どもの発達保障、教育カリキュラム。3つ目に、多文化共生を担う人づくりや、居場所づくりです。以上の点が、最近非常に重点が置かれ議論されているようです。教育実践に関してはかなり様々なものがありますし、今回のシンポジストの方からも色々お話を頂けるとと思いますので、ここでは割愛させていただきます。

最後に、今後の課題を大きくまとめてみました。

1 つ目は地方自治体レベルや国の政策に提言する視点、行動が非常にかけている点です。2 つ目は、様々な個人の意識に働きかけて、どう現状を変えていくかという視点です。非常にある意味両極端かと思いますが、どちらも課題として挙げられております。

3 つ目は私が本学会の2日間いろいろなパネルやご発表を聴かせていただいて感じたことです。それは、メディアの重要性です。新聞やテレビなどのメディアの中で、いろんな方たちがどう表象されているか。例えば、ステレオタイプの表象などです。この点は、私がヒューマンライブラリー³にお邪魔した時にも、話題になりました。表象の課題以外では、ソーシャルメディアをどう活用していくか、メディアをどう読み解くか、メディアとどう関わっていくのかというのも大きな課題かと思えます。

4 つ目は、積み重なっている理念、掛け声、などをどう共有して活用していくかという課題、5 つ目は、地方自治体のレベルで行われている多文化共生推進プランに、ことばの教育がどのように関わっていくかという点です。あまりうまく関わっていないのではないかという指摘もあります。以上の5点が今後の課題であると考えます。では、これに対して我々はどういうことができるのかでしょうか。その点を、これからシンポジストの方にお話いただきます。

今回は、多文化共生実現にあたって、どんな実践を行ってきたかということをお話いただきます。その際に、実践の背後にあるそれぞれの多文化共生観も語っていただきますが、限られた時間ですので本

当に触りだけになってしまうかと思いますが、ご了承ください。

それぞれのご発表の後、改めて、どのような問題点があったか、どういった解決法を探っていたかななどをディスカッションしていただきます。その後、会場の皆さんで小グループを作り、ディスカッションしていただきます。それではトップバッターは群馬県立女子大学のヤンさんですね、よろしくお願ひします。

1. 2. 多文化共生と教育：ヤン・ジョンヨン

ただいまご紹介いただきました群馬県立大学のヤン・ジョンヨンと申します。よろしくお願ひします。非常に大きいテーマを頂いてしまって、どうしようかなと困っております。本日は、私がやっている実践を、主にお話できればと思っております。まず簡単に私を知らない方もいらっしゃるかと思しますので、自己紹介を致します。私はヤン・ジョンヨンといいます。

私は韓国人です。ソウルから来ました。来日してから17年ほど経っています。初めは普通の留学生として日本語学校へ通って、大学、大学院へ行きました。現在は、群馬県立女子大学で働いています。今日は多文化共生と教育の話をしにこちらへ参りましたが、そんなに難しい話をするつもりは全くありません。いまお話した私のことばを「やさ日チェッカー」(庵, 2015)をかけてみましたら(図1)、「非常に易しい」と判定が出たので、やさしい感じでお話できればなと思っております。

まず、このシンポジウムにあたって、このようなお題をいただきました。いま現在のお仕事、仕事を通しての多文化教育と多様性について私自身はどういうふうに考えているか、教育に何ができるか、どんな実践をしているかということです。時間が足りないでそれぞれを交えながらお話いたします。

まず、私の仕事ですが、群馬県立女子大学の地域

³ 障害者や社会的マイノリティを抱える人に対する偏見を減らし、相互理解を深めることを目的とした試み。「ヒューマンライブラリー」は、『人を本に見立てて読者に貸し出す図書館』という意味で、『読者(参加者)』と『本(障害者やマイノリティを持つ人)』とが一对一で対話をする。(「ヒューマンライブラリー」, 2014より引用)

韓国人です。
ソウルから来ました。
日本に来て17年になります。
日本語学校で、日本語を勉強して、
大学・大学院に行きました。
いまは群馬県で働いています。
今日は「多文化共生と教育」の話をしにこちらに来ました。
どうぞ、よろしく願いいたします。

診断結果

クリア

診断



図1 自己紹介文のやさし日チェッカー

日本語教育センターで働いています。おそらく私が知るかぎり、日本初の大学内におかれた唯一の「地域」という冠をつけた日本語教育のセンターであると思います。やっていることですが、まず一つ目は日本語教員養成と、二つ目は生活者としての外国人に対する日本語教育としていわゆる日本語教室を設置していること、三つ目は教材等を開発すること、四つ目は県内の各関係機関（国際交流協会等）と連携することなどです。これらを本センターでは4本柱と言っています。しかし、実は、教員は私一人です。これからも増えるかも分からないので、できることをやっております。本センターで中心に据えているのが、一つ目と二つ目です。また、学生と一緒にやっているのが三つ目です。四つ目も声がかかったら、あるいは、こちらからも積極的に行ったりしています。どういったことをやっているかという、スライドにある通りです。県民の方と学生と一緒に学ぶ授業や、外国人住民と学生と一緒に学ぶような

仕掛け作りなどもやっています。

「多文化共生」という言葉を私自身よく使います。また学生にも「多文化共生って言葉を聞くとどう思う」と1年次の1回目の授業で必ず聞くようにしています。そうすると「多くの」「文化が」「共に」「生きること」かしらと答える非常に可愛い学生たちが多いです。しかし、それって具体的にどういうことって聞くと、だいたい答えられない。さらに、ちょっと「教育」って言葉を加えたところで、ますます分からないと言います。要するに、「多文化共生」って「楽しそうだから来てみた」とか「日本語教育と関係ありそうだから来てみた」という声が、学生から最初に挙がります。

多文化共生論という授業の写真を先ほどお見せしました。これは、学部1年次と県民に公開されている授業で、週に1回全15回の授業です。この授業で必ず伝えているのは、日本社会は既に多文化化している。そもそも、「あなた達の目の前にいる人が

まず外人だよ」というような話からまずしていきません。なので、日本社会の構成員はいわゆる日本人だけではないよという話の際、必ず数字を見せるんですね。まず日本に住んでいる中長期滞在者としての外国人の方のデータです。11 日に出た最新のデータですと増えていますね。223 万人以上です。そこから群馬にはどれくらいの方が住んでいるかと話を進めて、197 万人くらいの人口の中で 4 万 4,000 人くらい住んでいますと伝えます。群馬県ですとブラジルの人が多くて、次に中国の人が多いですが、全国的に見ると中国の人が圧倒的に多いねっていう話をします。

学生の反応は皆さんの今の反応と全く同じで「ふーん、そうなんだ、それで？」という顔をします。「どうやら多国籍・他民族・多文化化っぽい。なんか困っている人がいっぱいいるんじゃないか、なんかしてあげないと」という学生がいる。あるいは、「まあ日本のルールとかマナーは知ってもらわないと困るよね、騒音の問題とかあるよね」という学生もいます。ほかにも、うちは文学部と国際コミュニケーション学部があるんですけど、英語をやっている学生もいて「英語をもっと頑張らないと」という違う方向性に向けてしまったりもします。また、これが一番困っていることです。それは、「いろいろな人がいてもいいよね、私は関係ないから」という無関心、あるいは、「日本じゃない、日本じゃなくなるようでやだ、怖い」という意識を持っている学生も結構います。

今回、このシンポジウムに声をかけられたので、学生たちに自由記述をさせました。一回だけですが、ちょうど授業の 10 回目でしょうか、授業の中盤を過ぎたところでした。共起ネットワークを使ってみました(図 2)。「私にとって多文化共生とは」って言ったときに、どういうキーワードが多く出たのかなと思ってやってみました。そしたらやっぱり左側オレンジのところ、「日本」、「日本人」、「生

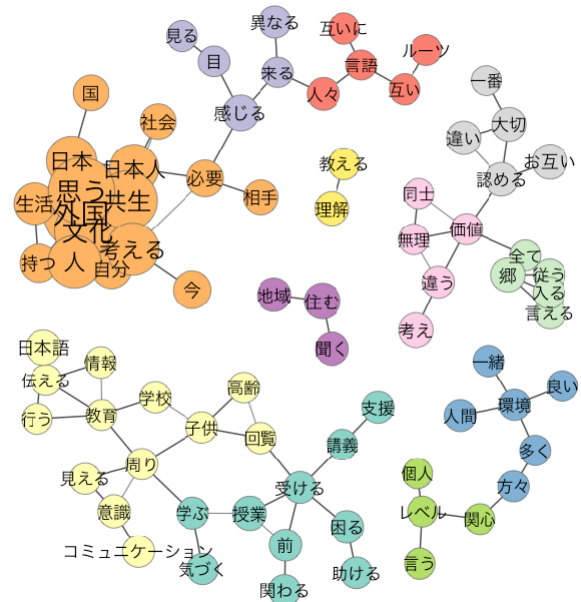


図 2 【自由記述】 私にとっての多文化共生

活」、「外国」、「文化」、「考える」、「自分を持つ」というところがわーっと出てきました。少し上に行くとやはり「感じる」とか「異なる」とあります。ちょっと黄色いところ真ん中、「理解をするために教える」という言葉がくっついていたり、あるいは左下、「日本語で伝える」、「行く」、「学校」、「教育」というような日本語教育系がまとまっていたりします。あるいは緑のところを見ると、「郷に入っては郷に從う」とあり、そう思っている学生がたくさんいることがわかります。

ただここで、学生たちに意識の違いが初回に比べればあるのかなと思って、記述させたんですね。そしたらやはり、他の国について、他の人について理解するってことはなかなか難しい。だけど、日本語が話せなくて可哀想と思うのは、私は多文化共生じゃないと思う。不平等だと思うというようなことをいったりする学生がいたりしました。また、何かしてあげる、教えるのではなく、一緒になってやるっていうふうに意識が変わったとかっていうようなことを挙げていました。ちゃんと理解したのかどうかは分かりませんが、一緒にやるっていうキーワードが出てきた時に、私はかなり嬉しかったんですね。

他人事とか何かしてあげる存在とか助けてあげる存在、とても可愛そうな存在ではないというところをちょっと感じてもらえたかなと思いました。まだ解釈、分析していないので、どんなキーワードがあるか並べただけですけど。少なくともこの文言たちを並べて彼ら、彼女たちが書いたものを見ると、関心がなかったところに私が毎週 90 分間吠えるものだから、まあちょっとくらい関心をもってみようかしらとちょっとずつ変わってきたのかなという印象はあります。

そこで多文化共生に立ち戻ります。先ほど佐藤先生からもお話がありましたが、多文化共生ということばは、いろんな定義がなされています。これは、群馬県の多文化共生推進指針プラン（群馬県、2012）の中の抜粋です。

「多文化共生」は、

- ① 互いの文化的違いを認め合うこと
- ② 対等な関係を築こうとすること
- ③ 地域社会の一員として、その個性と能力を発揮できること
- ④ 共に生きること

このプランの文言は、総務省の 2006 年に出されていたもの（総務省、2006）とほとんど変わりませぬ。総務省の出ていたものとちょっと違うなと思うのは 3 番目くらいです。「その人の個性と能力を発揮する」というところは、恐らく 2006 年のプランでは入っていなかったと思います。そこで、この文言を見た時に、私は果たしてこれを実践、実現しているのだろうか、実は自問自答しました。ちょっと皆さんにも考えていただきたいと思います。予稿集にもあるのでご自分で、イエスかノーかで考えてください。まず 1 つ目は、「多文化共生していますか」、っていうところからですね。まず、「互いの文化的な違いを私は認め合っているのか」。日本人

とか外国人とか関係ないと思うのですが、隣にいる人とか知り合いと認め合っているのかですね。次に「対等な関係を私は築こうとしているのか」。私のほうがちょっと優位に立とうとしていないか、私のほうがちょっと偉いと思っていないか。3 つ目は、「自分自身の、みなさんの個性を十分に発揮しているか」。「自分がこの社会の一員として共に生きているかどうか」。私の答えは予稿集に書いてありますので、ぜひ読んでいただきたいと思います（ヤン、2016）。実際に、“多文化共生力”という用語で以って測ってみると、私はどうもすっきりとした答えが見いだせない。でもそれを学生たちに多文化共生論という仰々しい名前をつけて、教えていることにすごくジレンマを感じています。多文化共生のこの 4 つの文言について「①文化的違いを認め合う」、「②対等な関係を築こうとすること」、「③個性と能力を発揮できていること」、「④共に生きること」、これらはそれぞれ違うことを言っていると思います。①と②は態度や心構え、③は個人の資質です。でも、④の共に生きるとは、私と、誰が誰と？というところがあると思います。ですので、この辺りが、学生が、あるいは私自身も、私と私自身も私と私以外の人と一緒に、何か自分の個性と能力を発揮しながら生活出来たらいいなと思います。しかし、そういう世界ってあるのだろうかという疑問に、私はまだ答えを持っていません。

話を戻しますと今回、「多文化共生と多様性」というテーマで教育に何が出来るのかというお題でした。私が実際にやっていることは、「多文化であることをまず伝える」ことです。私たちが生きている社会の実情を知ってもらい、それが他人事じゃなくて私たちのことだと伝えることです。ただ、共生ってキーワードに関しては、どうも私はすっきりしません。共生しなさいってことは教えられないです。共生するか否かは多分、個々人が判断すべきだと思います。快適かどうかという問題もあると思うから

です。

ただ自分が住んでいる社会の中で、自分も他の人も心地よく暮らすとなると、何もしないわけにはいかないでしょう。自分がまず、この社会の参加者になっていかないとはいけません。「誰が実現するの、あなたでしょ。」ということをおっしゃっています。なので、宣伝になりますが、こんなこともやっています。来週の金曜日、女子大でシンポジウム、講演会があるので来てください。学生たちを巻き込んで教材を作ってみたりだとか、センターの中でボランティアの方をたくさん来ていただいておしゃべりしたり、学ぶ機会の提供ってことで講演会などもしたりしています。ぜひ一度本学のページ⁴をクリックしてみてください。以上です。

次は、南浦さんにバトンタッチします。よろしくお願ひします。

1. 3. 「私たち／彼ら」像の捉え直しと向きあう——教員養成の場所から：南浦涼介

南浦と申します。私のことをかいつまんでお話をさせていただきます。私は、山口大学というところで仕事をしています⁵。山口大学で私は何をしているのかといいますと、先ほど少し出た社会教育と教員養成という仕事です。私は、少し変わった立ち位置で仕事をしております。一つは、最初に紹介しましたが、小学校から高校までの社会科教育の教員養成の仕事をしています。あまりイメージにないと思いますが、この仕事は、地理とか歴史だけを教えるだけではありません。もう少し広い意味で、世の中を学ぶという意味でやっています。社会教育で目指すことは、幼稚園、あるいは小学校から高校、大学になるまで、人が社会を学んで社会で生きていくために、どういうふうにならなければならないのか

ということです。この点を目指し、教員養成をしています。

もう一つは、小学校の教育というコースに属しています。むしろこっちのほうがメインです。ここでは理科とか算数とか国語とかいうものを取り上げず、全般的に小学校の先生になるためには、という仕事をしています。

以上の2つが基本の仕事になります。しかも、自分がもともと研究していたのは外国人児童生徒の教育でした。しかし、山口っていう場所では、外国人児童の教育という地域課題が占めるウエイトは大きくはありません。ですので、メインの自分の仕事にはなかなかかなりにくいという実情があります。以上のこともあって、今の私の仕事の中心は、大学での学びや、教員養成大学の改革といったことが挙げられます。特に今、教員養成大学ってというのは非常に厳しい状況にあるからです。他の仕事では、県内の特に現場の教師の人たちの支援です。また、地域のコミュニティに学生を連れて行くなど、かなりいろんな事を思った順番にやっています。そのため、南浦の専門性はなんですかと聞かれた時に、答えられなくなってきています。だから、まとめていうと、教員養成の仕事をしていますというのが、一番ぴたりきているなと思います。

今回のテーマに関わる出来事で、一つこんなことがありました。以前、近くの小学校に学生のボランティアの関係で行きました。その学校に6年生のいろんな作品が貼ってありました。どんな作品かというと、国際理解の単元で、いろんな国を調べてポスターにしてグループで作成したものでした。例えば、アメリカとかいろんな国を取り上げ、国の課題などの紹介を織り交ぜながら、作成していました。そのポスターを教室外のオープンスペースに掲示していたんです。ポスターの最後にある感想で、「○○国は大変そうだな」、「私は日本に生まれてよかった」と書かれていることがありました。よくあるこ

⁴ <http://www.gpwu.ac.jp/org/nihongo/>（群馬県立女子大学 地域日本語教育センターインデックス）

⁵ 当時。2016年度から東京学芸大学に異動。

とです。しかし、これをふと見た時に、なにか、ちょっと、根が深い問題だと私は思ったんですね。ここにいろんな意味が込められていると思うのです。「日本に生まれてよかった」という言葉を子どもが書いていることを先生が見て、ポスターを掲示するとはどういう意味なのでしょう。いろいろな事情が考えられます。問題があるとは思いつつ、忙しいから掲示したのかもしれない。もしくは、先生自体がそもそもそれでよかったと思うところがあったのかもしれない。これだけで一概に何も言えません。けども、もし自分が先生であったら、こういう感想見た時にどういう対応をするだろうか。このことを考えることは、すごく学校の先生の教育観にかなり関わってくると思うわけです。その場で何か言った訳ではありませんし、色々な事情があったと思いますが。

そういうときに、私がひとつ大事にしているところの視点について述べたいと思います。

教員養成の仕事を語る際、よく学習指導要領って言葉が出てきますよね。なんとなく、私たち学校の先生たちは学習指導要領に縛られて大変だとか出てくるわけですよ。特に多分、この学会にいる人は、学校を傍から見ている部分があって、余計にそう思うのかもしれませんが。もちろん、確かに教員を縛っている側面っていうのはあるかもしれない。けれども、よくよく考えてみると、学習指導要領っていうのは、結構ざっくりとしか書いていないのです。大綱であって、先生の日々の一日一日の授業を縛っているわけでもありません。このような言い方をすると、文科省から来た人みたいにみえますが、そうではありません。学習指導要領は、教師を全て縛っているわけでもないし、一回一回の教育活動をシラバス的に規定しているものでもないわけですよ。

社会の授業なんて特にそうです。指導要領の文言に『『民主的な国家・社会の形成者』を育成する』と書いてあります。そのために、例えば5年生では

日本の工業とか農業の勉強をしましょうと書いてあるわけです。となると、これを1時間や単元という形で授業にする際、解釈の力が出てきます。先生自体が『『民主的な国家・社会の形成者』を育成する』という言葉はどういうふうに読み取っていくのかという点です。

例えば、「民主的な国家・社会の形成者」とは何か、自分の中で理解できていないとします。その人の国家社会の形成者の観点がどうあるかによって、具体的に授業でどうしていこうかも異なってくるわけです。例えば、日本の農業っていうのを、農業の従事者のみなさんがすごく工夫して頑張っていることに焦点を当てたらいいのか、あるいは今の日本の農業の課題から考えていったらいいのかということです。解釈によって、授業の焦点も、かなり違って来るわけですね。

ですので、あくまで学習指導要領は、大まかな指針でしかありません。実際の日々の授業の中では、また先ほどのポスターの例のように子どもたちから出てきた単語やことばに対して、どういう対応をするのかは、解釈が大きく関わってきます。先生の「教育観」あるいは、社会科でいう「世の中観」、共生の問題でいうと「多文化共生とは何なのか」という、「共生観」がかなり関わってくる問題であると考えます。

だから、私はこの多文化的状況において共生を目指すにあたって、大きな影響をもたらす解釈のひとつに、「私たち」の問題が特に大事だと思っています。この「私たち」とは何を指しているのでしょうか。特に、山口の地域ですと、例えば新宿などの大きな街と異なる点があります。今日も新宿で朝ごはんを食べていたら、僕の周りの人はタイの方や中国の方だったりしました。周りに外国人と呼ばれるような様々な人がいると、少しは多文化共生の問題を考えないといけないと思ったりするのではないのでしょうか。

しかし、山口県のようにそうではない地域では、「私たち」は日本人だという、なんとなくの前提があります。この前提をどう崩していくかという問題が、非常に大事だと思います。そのため、「私たち」や「国民」、あるいは「共生する」、「共に生きる」といったことばに対する、〇〇観を学生たち自身がやっぱり持ち、考え、積み直していかなければいけません。学生たちが将来、先生としての仕事をする際、解釈の問題が出てくると思っています。なので、大事に行っていかなければいけないことは、学生たち自身の「私たち像」をどう捉え直させていくかだと思っています。

次に、具体的な実践の話を紹介します。色々授業を持っているので、全部が全部このようなことをしてはいませんが。いくつかの授業で行った内容を紹介いたします。

実践例1は「社会科教員志望学生×留学生×『私たち』」は社会科教員志望学生と留学生センターの先生と一緒にいった合同授業です。ここでは、様々な社会問題についてディスカッションしていくことで、「私たちの像」を変えていこうという実践です。教育実習に行ったりする準備の時間のため、授業全部をこの時間に当てていません。15週間の中の5週間ぐらいを使っています。

例えば、「私たちの名札はどのように書けばいいのか」というトピックで話し合います。これは、まず一緒に名札を作ります。名札を作るときに、以下の様なことを話し合います。

- ・そもそも自分たちはお互いの名前を漢字で書けばいいのかカタカナで書けばいいのか。
- ・カタカナで本当の名前を表せているのか。
- ・漢字といっても中国の簡体字で書いたらいいのか繁体字で書いたらいいのか。
- ・日本の漢字で書いたらいいのか。
- ・あるいはローマ字で書いても、ローマ字であ

っても中国語のピンインの方がいいのはいか

- ・台湾では bopomofo⁶のほうがいいのではないのか。

名刺にもいろんな書き方があるわけです。どのように自分たちの名前を表記すれば、お互いの間でうまくいくのかを一緒に考えていく授業をします。

次は、あのアニメは誰のものかというものです。例えばよく日本のアニメは有名だという話があるかと思っています。『千と千尋の神隠し』とか、最近のアニメでも、エンドロールのスタッフ名を見ていると、すごく外国人の名前が出てきます。エンドロールなどを見て、『進撃の巨人』は日本のアニメだっと思っていただけ、本当に日本のアニメと言っているのだろうかという話から始めていきます。そして、次の時間に日本人が誰を指すのかっていう話をします。

他の話題には、学校の周りの地域の人という話題です。自分たちも地域の人で、留学生も地域の人って入っているはずですが。しかし、地域の人という、どうも自分たちは入っていないくて、昔からそこに住んでいるおじちゃん、おばちゃんたちのことを指しているような気がする。地域の人ってなんだろうと考えます。例えば、地域でゴミ当番は誰がやるべきなのかを話していきながら、これからの私たちや共同体を考えていく授業をしていました。

他の実践では、ヒューマンライブラリーというものも教員養成でやっています（実践例2「小学校教育教員志望学生×ヒューマンライブラリー」）。よくヒューマンライブラリーは様々なところで行われていますが、教員養成のため行っているところは少ないかと思っています。ヒューマンライブラリーそのものについての説明は、様々な実践がありご存知の方も

⁶ 注音字母。

いるかと思うので省略致します。

以上の活動を通し、自分たちの「私たち観」や、自分たちが苦手だと思う人たちと自分たちとの関係をどう捉え直していくかというリフレクションを毎年させています。

ただ今年は、ヒューマンライブラリー当日、山口と福岡が大雪になり、開催できませんでした。そのため、理念とプロセスだけで終わってしまいました。学生たちには申し訳なかったなと思います。先輩たちは、毎年南浦先生が授業で、毎年重い言葉を吐いて、すごく重くなるけど、最後、分かってよかったねっていうのに、今年の私たちは最後の開放感が全然なかったっていうふうに終わってしまったので。

最後に話をまとめますと、いろんな活動をする中で、難しいなと思うのが、なぜ、このような学習を社会科教員養成課程で行う必要性を伝えることです。

名札などは授業としての中身は面白いものであると学生たちもわかります。しかし、なぜこの学習が社会科教員養成課程の中等公民教育論の中でやらなければいけないのかが分からないと、出てきたりします。僕も伝えきれなかった点もあります。しかし、学生たちの中で、教育法の授業っていうのは教育技術の獲得であって、哲学的なものや概念的な学びは、別の専門科学、例えば哲学の時間にやったらいいのではないかと考えています。そのため、自分たちの観を鍛えることの大事さが、教員養成カリキュラムの中でなかなかつながっていかない。このもどかしさが、かなりあります。

今年はこの部分が、かなり問題になっていました。これまで4年くらいやってきていますが、一番失敗したなと思っています。授業の中身としては成功したと思います。それにもかかわらず、全体の取り組みとして、学生の意識の中で失敗したのはなぜだろうかとすごく考えています。

また実践例2のヒューマンライブラリーでは、学生たち自身は私たちっていうものの変容はあったと話しています。今年に関しても、実際の方はなかったけれど、プロセスの中でそれはあったと話はずごくします。ただ、やはり自分の最初の目的であった、教師になっていった時に、変容がどういう意味になっていくのかは、まだ聞いていません。もちろん彼らは卒業していないし、さらにいうと卒業した学生にそれを聞いて、ことばにしてくれるのかも分かりません。そして、自分でも聞くのが怖いというのがあります。教員養成の中における多文化共生観を作るっていうのはなかなか難しい問題でもあると思います。しかし、葛藤をさらに考えていく必要があると思っているのが自分の立ち位置です。ありがとうございます。

1. 4. 学習環境づくりという視座：宇都宮裕章

私は、この学会員ではありませんので、今、少々アウェイ感があります。しかし、これまでの人生を振り返ってみますと、アウェイ感の中で生きてきたような気がします。私、生まれは宮崎ですが、小さい時に長野県に行きました。その後、小学生3年生か4年生で群馬に引っ越して、高校を卒業しました。その後、神奈川に行くなど結構、各地を転々としてきました。よく、土地土地で方言といいますか、その土地のことばに接します。しかし、なかなか私自身がうまくコミュニケーションできませんでした。もちろん外国人の子どもほどの疎外感ではないですが。なかなか相手と上手くコミュニケーションできないというのが、ずっとトラウマのようにありました。そのため、いつでもアウェイ感を感じておりました。静岡に来てやっと20年くらいになりますが、なんとか落ち着いてきたかなと思います。でも、「しょんない」とか「したっけ」っていうような静岡弁はなかなかうまく使えないと感じています。アウェイ感を感じて生きてきた中で、自分が一

体どこにいたらいいのだろうかと、常に考えてきたような気がします。そして、自分が使っていることばというのが、相手との関係性を取るにあたって、どういう意味合いを持っているのかなと、おぼろげながら考えてきたように思います。

今、私は大学で留学生と接することも結構多く、直接日本語を教えるっていう授業もしております。教育っていう観点から専門の授業を持っているので、その中で留学生と接することが主です。

ここで、いくつかエピソードを紹介しようと思います。最初は、インドネシアからの留学生の話です。その留学生が、「無いものは無い」っていう表現はとてもおもしろいですねと言いました。伊勢丹とママであったことだそうです。伊勢丹っていうのは静岡にあるデパートで、ママっていうのは静岡で何件かある食料品店です。留学生は、たまたまボールペンを探していました。そのとき伊勢丹でも、「この店に無いものは無いんだよ」、ママでも「無いものは無い」って言われたそうです。けど、よくよく考えてみると全く意味が反対になっているということに気づいたそうです。あっ、こういう表現もあるんだねと。偶然にも同じ言い方だったけど、意味が全く違うということを話してくれました。私もそれは気づかなかったので、あんなほど、そういうふうに感じるのだな、そういう視点を留学生は持っているのだと感じました。

それからですね、これは私自身の話ですけれども。私は留学生といろいろ接する機会が多くて、お土産をいただきます。なかでも、静岡大には中国からの留学生が多いので、中国茶をよくもらいます。ただ、私は飲まず嫌いといいますか、どうも最初、中国茶のあの香りというか、強烈で、なんとなく飲みにくいと思い、飲みませんでした。そうこうしているうちに、部屋いっぱい中国茶が溜まってしまいました。流石になんとかしなければいけないと思って飲んでみることにしました。たまたま入れ方が

良かったかどうかは定かではないですが、同じ香りだったはずなのに、すごく馥郁^{ふくいく}としたすごく芳ばしい香りがしました。これが中国茶なのか、おいしいなと思って、最近をよく飲むようになりました。それまで、ちょっとその腰が痛いとかもあったのですが、飲み始めるとなぜか、よくなったりもしました。いずれにせよ、なんか飲みにくいっていう気持ちがあるきっかけで飲めるようになったというのが私の見解です。おそらくこの2つのエピソードは、解釈とか理解は変容するということではないかなと考えています。案外、自分自身には抵抗感があっても、そうした変容には順応ができる、また、順応する時間もほとんど掛からないのではないかなと思います。

多文化共生の問題は、本当に難しい問題で、私にも多文化共生ってどういうものか未だに分かっておりません。ただ個人のレベルでは、突き詰めれば違いというものをどこまで許容できるのかという問題ではないかと思います。自分だけの問題で良ければ、意味や価値の違いに気がついて、それを味わうっていうのも多分たやすいでしょう。また、変わったことを了解していくことも比較的やさしいことかと思えます。ところが、人が集まる、社会を作るとなると、受け入れが難しくなるところ、逆に排他的になるところが目立ってきます。私が接してきた教育現場は、現代日本社会の縮図というようなところでした。このように言うのは、多分教育現場というのは社会の縮図になりうると思うからです。これも予測の範囲に過ぎないのですが、教育現場を変えることができれば、もしかすると社会問題の解決に繋げることが出来るのではないかと考えています。こうした観点が、このシンポジウムのタイトルでもある「教育に何ができるのか」に対する私なりの回答になります。

みなさんの思うとおり、日本の教育現場はマイノリティに厳しい社会といえるかと思えます。教育現

場は、異なるのがあまりよろしくない、異なってしまふとよろしくないという雰囲気になってしまっています。ですが、上手くそれを逆転させて、異なりを活かしていく、違いがあるからこそ面白いという学びを作り上げる。そこから実践の取り組みに繋がっていけば現場も変わっていくのではないのでしょうか。そして先程申し上げたように、教育現場から社会へ発信していく、社会を変えていくことにも繋がっていくかと思えます。ちょっと大げさな表現かもしれませんが。

これから紹介する私が接した現場は、異なりに寛容な風土という点で共通している現場です。ただ残念ながら、何がきっかけでそのような風土になったのかという、ベクトルの転換点には私は立ち会うことができませんでした。そのため、正確にはどうしてそうなったのかという理由は、私自身にも分かっていません。ですが、実にこう一人一人が、生き活きと学んでいる教室、教育現場でした。そうした学習環境を作っていくにはどうすればいいかが、私の最近の研究のテーマになっています。繰り返しますが、教育現場だけでも、多文化共生とわざわざ言わなくてもいいほど、多様な子どもたちがいます。それぞれいろんな考え方を持っている、いろんな性格を持った子どもたちがいる、教育現場は多様性を持った現場です。

そこで、多様性に寛容になる地点が分かれば、そして、どうしたら変えていけるのかが分かれば、社会全体の多文化共生という大きな問題に対し、発信ができるかと思えます。私が最近考えている観点は、以上のような観点です。これも先ほどの繰り返しになりますが、観点とは、違いがあつていいという、違いがあるからこそうまくいくという教室環境作りです。

異なりを上手く活かしていくという視点を、持ちながら教室環境を作るといいと思います。実際に私が接してきた教育現場も、そうした雰囲気でした。

理論的にはその明確な理由が未だに分かっていないという点が残念なのですが。

これからご紹介するのは、ブラジルのサンパウロで私が見学させていただいた授業です。ちょうど日本の中学 2 年生に相当する 8 年生の授業です。ポルトガル語の授業ですね、要するに、ここにいる私たちでいえば国語にあたる授業です。この授業の面白いところは、この学校全体では、最初からグループごとに机が並べられているところです。普通、教室というと今の会場のように前に教師がいて、教師と向かい合うように生徒が座る、対面式に机が置かれています。しかしこの学校では、どの教室も最初から、子どもが向かい合う形で机が置かれ、島ができています。この机の並びから分かることは、この学校は、授業で話し合うことを前提とした学びの場であることです。最初から、班になっているのです。そして、この授業で面白かったのは、個人の学習が班の学習に移っており、個人だけの学習に焦点が当てられていないことです。そして全体的な学習にも焦点化されていないのです。それが、本当に混沌とした有り様を呈していて本当に面白い。それから次に面白いのが、ことばを学びながら、ことばを使うということを同時に行っている点です。この授業では、意見とは何かについていうことをテーマにした授業でした。自宅から新聞を持ち寄ったり、家でラジオのニュースを聞いた事を出し、授業で「これとこれは、実はこうだった」と考えていくため、学校の中で完結していないっていうか、外の世界と必ず繋いだ授業をしていました。

次に、静岡県例を挙げてみたいと思います。これは日本語の授業で、いわゆる取り出しで行われている授業です。取り出し授業の中でも、子どもたちの普段の生活に直結する食べ物や家族のことなどを必ず取り上げています。それから、その子のための取り出し教室、つまり支援教室と、その子が所属する在籍学級とを切り離していません。ある意味、学

級の子を取り出して、特別教室に来てもらい話をするといった制約を設けていません。自由に行き来してもいいのです。ことばに関しては、このクラスでは日本語を学びながら、ことばを介して友達になるとか、一緒に宿題をするなど、学ぶためだけでなく日本語をツールとしても利用していく、運用していく学習をしているところがみられます。

また、こちらも外国に繋がる子どもたちの授業の話です。最初、この学校では取り出しの授業をしていました。しかし、算数でも、日本人の中でも苦手な子がいたりします。そのため、このクラスは外国人のための特別なクラスというより、いろんな国やいろんなクラスの人達が集まって、一緒に勉強するクラスになりました。例えば、ある子どもがなかなか算数についていけないとすると、その子も入って構わないというクラスです。このクラスでは随分、活発な授業が行われています。ここでも同じように、ことばを使って学習していきます。教員側はよく、ことばが通じないと授業ができないという気持ちになってしまいがちです。しかし、必ずしもそうではありません。私もびっくりしたのですが、ほんとに、普通の学級と同じ単元、同じ教材を同じ進度で授業を行うことができるのです。ゆっくり話すなど、やり方にもよるでしょうが、進度を全く同じように合わせることも可能だということです。お互いに学び合う授業を作ることも、できるのです。次のこのスライド写真は、中学生ですね。ここには、外国に繋がる子どもたちも一緒に授業に参加しています。もちろん、その子にとってはついていくのになかなか大変な授業です。しかし、お互いに学び合う、ことばを介して勉強し合う作業を繰り返していく中で、学習が可能になる授業ができるのです。

3 番目は、ことばで発言し、質問し、表現し理解していくことの大切さを示しています。完璧な理解ではないにしても、やはりことばを通していろんな物事は理解できることが、ことばを使う上で大変重

要であることを実感していくような授業であります。

この事例は、私たちが実践したものです。大学生をある外国人学校、ブラジル人学校に派遣して行わせる技術の授業です。おもちゃを作る授業ですが、ブラジルには、技術科という教科がないようです。そのため、のこぎりを使ったり、ナイフを使ったりしておもちゃを作るといった経験がない子どもが多いそうです。それでも、技術教育を研究している学生が出かけて、色々教えていきます。ここで行うのは、一緒におもちゃを作っていく活動です。当然、学生たちはポルトガル語を入念に勉強しているわけではないため、子どもたちとコミュニケーションするときも身振り手振りしながらコミュニケーションしています。それでも、子どもたちにとっては、立派な学びができています。そのため、ことばが通じるということが前提になっていない授業が、とても面白いと思いました。この事例のような技術的な習得を考えたうえでも、子どもが、おもちゃを作り、楽しいという意味を見出すことで、総合的な学びができる、そういう実践です。

私も、インドネシアで授業をすることもありますが、私もインドネシア語はあまり話せません。そのため、学生とどうコミュニケーションするのかで、結構問題が起きたりします。それでも先ほどの技術の事例のように、専門的な授業においても、ことばを通して、お互いのやりとりを通して学び合う、学びが出来るのだということを実感しています。

1. 5. 多文化共生とことばの教育：山西優二

こんにちは、山西といいます。私はパワーポ⁷を授業で使ったことがない人間です。二十数年パワーポで授業をやったことがない、携帯も持っていない、ス

⁷ PowerPoint。プレゼンテーションソフトのひとつ（マイクロソフト製）。

マホも持たない人間です。ですので、発表では、常に語りか資料しか無い。発表中、停電が起こっても大丈夫という人間です。ですから、もし可能であれば、予稿集⁸ (山西, 2016) を見ながら話を確認していただけたらと思います。

早稲田大学に所属していますが、簡単に自己紹介をします。私は、開発教育、国際理解教育の分野に30年ほど関わってきました。最初はNGOの立場から、開発教育・国際理解教育といった活動に関わっていました。大学の教員になって22年ほどになりますので、大学の教員をやりながら、NGOもやってきました。また今、逗子に住んでいますが、逗子でも20年ほど地域づくり、社会福祉協議会やボランティアセンターの活動をしています。またここ数年は、教育委員会の教育委員もやっていますから、市民そして行政の立場から地域づくりと教育づくりに20年ほど関わってきています。ですから自分の中では教育を語るときには、当然大学教員という立場から学校教育も想定しますが、市民運動の中でどういう教育をつくるか、さらには地域の中で、地域づくりと連動する学びをどうつくっていくとかということはずっとやってきているため、あらゆるものを含めて語りたくなります。このような立場で、今日もお話をさせていただけたらと思います。

あと、先ほど宇都宮さんのエピソードで中国茶と日本茶が出てきました。これを聞いた瞬間に言いたくなることがありました。私はお茶が大好きなのです。今日の来場者の中に、私の教え子もいますね。私の研究室に来るとお茶がだいたい40から50種類はあります。日本茶、中国茶、紅茶含めてです。私は紅茶を求めて、ダーズリンまで旅するほどのお茶好きの人間です。また研究室には、私の好きな陶芸家のカップが50客くらいあります。研究室に来たら、まずどんなお茶を飲みたいかという話から始

まって、そこから一人一人お茶とカップを選んでいきます。今日は癒やされたいと言ったら癒しのお茶を入れ、刺激がほしいと言ったら刺激のあるお茶を入れ、お茶に応じてカップを選びます。まさしく、これこそ人間関係の基礎づくりだと思いませんか。多文化共生に向けてのひとつのきっかけは、お茶をどういう空間で、何を介して飲んでいくかということに示される関係づくりにある。これは地域でもそうです。どこに行ってもそうです。ひとつの学校空間の中でもそうですが、このような関係づくりをどう大切にできるかが重要です。そして、お茶の中には、また焼き物には全て文化性があります。お茶や焼き物などの文化性をしっかり読み解きながら、一緒に時間を共有できるのはすごく大切なことです。生活の中には、お茶のような多文化を語るきっかけが、本当にたくさんあると思っています。もし気が向けば、早稲田の研究室にお越しください。山西カフェと呼ばれています。遠慮なく遊びに来ていただけたらと思っています。

最初の話は、私の抄録 (山西, 2016) にもありますが、まず文化っていうものをどう捉えるかという話です。多文化共生を語るときに、私たちが文化っていうものをどう捉えてきているのかという問題です。そこをまずしっかりおさえなければいけない。まず文化というのは、一般的には集団によって共有される生活様式、行動様式、価値の一連のものという捉え方があります。しかし、重要なことは、文化はなぜ創り出されたかなんです。基本的には、共に生きるために、何らかの問題事象に対して共にその問題を解決していくために、なんらかの共有する活動を通して、「こういう価値を置いてみると、ともに生きることが出来るじゃないか」という価値観が、徐々に徐々に伝わっていき、文化として定着していくわけです。ですから、文化は、問題解決の一連のものであるという定義さえ成立します。ですから、文化とは本来問題解決のプロセスで創りだされ

⁸ 予稿集は大会WEBサイトで公開されている。
http://alce.jp/annual/proceedings2015_all.pdf

てきたものなのだという捉え方をまずしておく必要があります。もし文化の捉え方がしっかりしない中で、多文化共生を語ってしまうと文化が見えないのです。ですから、まずは文化っていうものをどう捉えるかが非常に大切です。

そして、もう一つは文化がどういう状況にあるのかです。確かにグローバリゼーションの中で、文化は、非常に多様化しています。とは言いながら一方で、グローバリゼーションは、文化を非常に均質化しています。均質化と多様化が同時並行で起こっています。ですから、多様化だけを見ってしまうと大変なことになります。経済のグローバリゼーションは非常に文化を均質化しています。その中で、例えば、国連を含めた色んな所は、人権、平和、持続可能な開発のためといった公正といった概念を謳っています。この動きは、普遍的な文化を創りだそうとしていると捉えられます。ですから多様化の一方では均質化が進み、いわゆる緊張関係を生み出しています。また一方で、普遍的なものを創りだそうとしている。このように今、文化が非常に動的な状態にある。この中で、多文化共生をどう語っていくかということをしっかとおさえておかないといけません。文化のある部分、多様化だけを取り上げて、多文化共生は語れないというのが、私の今の文化に対する捉え方です。ですから、そういう中で多文化共生を語るにあたっての私なりの多文化共生に対する定義は、山西（2016）の中の下線を引いた箇所（pp. 48-49）にあります。現在の社会の中（人間の間）に、人間の中に、文化間の対立・緊張関係が顕在する中であって、それぞれの人間が対立する人間関係の様相や原因を歴史的、空間的の中に読み解き、より公正で共生可能な文化の表現・選択・創造に参加している動的な状態です。この表現はちょっと難しいかもしれませんね。

もう一つ大切なのは、文化は、私たち人間の中に多層的に存在しているということです。人間一人が

一つの文化を持っているのではないのです。私たちの文化は非常に多層的なのです。地域性であったり、時にはジェンダー的視点であったり、さらには年代であったり、いろんな行動様式を、私たちは多層的に持っています。特に外国につながる子どもは、その文化が、言語文化も含めて多層化する中でどう調整していいか難しいのです。そのためジレンマを抱えている子どもは多いわけです。その子どもたちに、世の中には多様な文化があるからそれを尊重したらいいですよと相対主義的に文化を理解しろと言っても、子ども自身の中の文化の問題は解決しないじゃないですか。子ども達は多様なアイデンティティーの間で揺れ動いています。自分のアイデンティティーをどう選び取ったらいいのかという状況の中では、ただ相対主義的に文化を理解するというだけでは問題は解決しません。多層的な文化が、自分の中にも起こっているし、他者との間でも起こっているのです。ですから、自分の中で起こっている多層性と、他者との間で起こる文化の多様性を、全体の中でどう位置づけし直していくかが重要です。まさに、多文化共生に向けては、文化間に緊張関係が生じているわけですから、どういう関係をつくり出していくかということ捉え直していかなければなりません。そのため、多文化共生は非常に動的であり、非常に変容的です。このことをおさえておくことは必要だと思います。じゃあ、このように多文化共生を捉えていくと、どのような教育が可能なのでしょうか。

そこで、先ほどの私の多文化共生の定義を見ていただきたいのです。最終的には、共生の文化を創り出すことが、私の主張だと思っています。先程もお話しましたように、多様性の中に、共生の文化を醸成していく、創り出していく。多文化共生に向け、このプロセスを地域の中で、学びの中で作り出していくことが必要であるなら、教育はどうやっていけばいいのでしょうか。仮に、文化は問題解決のプロ

セスによって徐々に醸成され創り出されていくものならば、教育のプロセスを問題解決のプロセスにしていくのが一番素直な答えではないでしょうか。いろんな状況の中で、必然的ないろんな課題に対して、一緒に解決していくのです。ある課題に対して、僕はこういう考え方を持っているけど、君はそういう考え方なのですね、という過程を共有する中で、なんらかの共通性を見出し、行動に移していく。こういったプロセスをどうつくり出していくのかが、多文化共生を語るときに一番大切です。このプロセスの中で、普遍的な部分と人間の中の多様な部分の間で、動的な関係がつくり出されていきます。やはり文化は私たちが創り出してきたものですから、これからもどのような共生の文化を創り出せるかが、教育を語る時の基本だろうと思っています。

以上のような方向性で多文化共生の教育を語るとどうなののでしょうか。予稿集の 52 頁(山西, 2016)を見ていただきたいと思います。以前、日本国際理解教育学会で、ことばと国際理解について 3 年ほど特別課題研究を行いました。さらには 2011 年から 2013 年までの科研費研究である「多言語多文化教材の開発による学校と地域の連携構築に向けた総合的研究」では、多言語多文化教材を作り、ウェブサイト公開しています(山西, 2014)。ですからこの予稿集にある事例はそのウェブサイトに掲載されています。ぜひとも参考にいただければ、いろんな実践が可能になってくるのではないかと思います。

ご紹介した事例の中に、例えば、多言語で味わう 25 の音という教材があります。横田和子さんもメンバーの一人で、協力していただきました。テーマを決める際、言語の音を、20 から 25 言語分集めようという話になりました。でも言語の音を集めるといってもどういう音を集めたらよいか問題になりました。時期は東北の震災後だったこともあり、谷

川俊太郎さんの「生きる」という詩を 25 言語に翻訳してその言語話者に語っていただき、全部教材にして折り込むことにしました。アイヌ語からアメリカ英語、オーストラリア英語、シンハラ語、関西弁、広島弁もあります。25 の音が入っています。これは、実践の中でどう使うのでしょうか。使い方なんていくらでもできます。

では私たちがなぜこの教材を作りたかったのでしょうか。日々生活の中で、特に首都圏にいますと、電車の中などで多言語の音を耳にすることは多くあります。その音を耳にした時、その音を聞いたことがないと一歩離れたくなるかもしれません。しかしその音を聞いたことがあると、もう少し聞いてみようかなと一歩近づきたくなるかもしれません。非常に感覚的なことですが、この一歩離れるか、一歩近づくかという違いが、生活の中で他者との関係をつくる際、とても大きな影響を持っています。ですから、できるだけ多くの言語の音に触れてほしいと思います。違う音にちょっとでも興味を持つ。このような関係をつくっておくだけでも、共生を考えると非常に大切なきっかけになっていくと私は考えています。

たまたま今日二人教え子が来ています。ですので、教材ではないのですが、二人の教え子に関わる事例を紹介いたします。昨年の 10 月 10 日のことです。東京都が主催しました大学対抗多文化共生プレゼン大会の事例です。すごいですよ、大学対抗多文化共生プレゼン大会ですよ。これは、東京都の 5 大学、法政大学、中央大学、東京外国語大学、早稲田大学、明治大学を代表するゼミ生が、東京都の多文化共生に向けての提言をするものです。東京都はオリンピックに向けて、こういった動きを今すぐくしています。私たちのゼミからも出たわけですが、そこで、学生たちが何を語ったかというと、「日本人から外国人に対してしてあげる、外国人はしてもらうという関係をまず捨てよう。そして異文化的な出

会いを越えよう。だからもっと個人の多層的な文化と個人の多層的な文化が会っていきような関係をどう作るか。もしくはイベントではなくて、もっと個人の生活、個人レベルでまさしく内なる多文化に出会いながら、外側の多文化に繋がるような関係が生み出される。そのためには多文化マルシェを作りませんか」ということを語りました。地域レベルで、もっと具体的な出合いを生み出していきような場を作り出すマルシェというのは最近いろんなところで言われています。そしてゼミ生は、「多文化マルシェという場を、もっと地域レベルで作ることで、海外から来た人が海外の地域の中で出会ってきた文化性と東京の地域における文化性が出会う。そして、いつの間にか国と国の関係を越えた中に、新しい関係をつくり出していきのではないのでしょうか」という提言を出しています。

以上のような実践は際限なく出てくるかなと思います。先程もお話したように、やはり多文化共生と教育の関係を考えていくと、多文化共生に向けての問題解決のプロセスの中で、根底に課題と必然性というものがしっかり設定されていれば、人間は動くのです。その関係の中からどういう文化を醸成していきのか、それに対して教育はどのような形で働きかけるのかによって、そのプロセスを一步でも二歩でも進められる。そういう関係として多文化共生と教育が連動すればいいなと思います。以上です。

2. シンポジスト・ディスカッション

■佐藤⁹：時間も限られていることと、私がこの司会者という役割を務めていますので、私の独断と偏見といいますか、私が聞きたいなと思うことを含めて進めていきたいと思います。また、実際にいろいろ抱えてらっしゃる問題点のお話などは、これから

考えていきたいといったように回答された方が多かったのではないかと思います。この点ももう一度、一緒に考えてみるということで、進めたいと思います。

最初のヤンさんのものと、他人事をどう自分事にしていくのかという課題です。それに対する一つの回答というのは、先程図に出していただきました。自分の関心になったという学生の感想もあり、これも一つの回答なのかなと思いました。予稿集(ヤン, 2016)でも、今回の発表でも、ヤンさんのことばの中には、共に生きるとはどういうことなのかと、疑問が挙げられていました。また、多文化の文化の部分に関しては、山西さんの方でもかなりお話いただいたかと思います。そこで、共に生きることをどう扱ったり、どう考えたりするのかに関してコメントいただければと思います。いかがでしょうか。

■ヤン：共に生きる、共生ということばに、私は非常に引っかかっているという話をずっとしていました。私一人暮らしなので、日本に家族はいないので、仮に誰か一緒に住んでいるからといっても、共生できているとも思えません。だからといって、外国人の友だちや自分のテリトリー以外の人と知り合ったとしても、それが果たして共生できているのかって言うと、恐らくそうでもないと思います。先ほど山西先生がお話くださったときに、触れるっていうキーワードが出てきたかと思います。まずは、自分とは違う誰かがいるっていうところをいかに認識させるかっていうところが一つのキーになるのかなと思います。

私自身は、非常に、いわゆる教育現場では無関心ということに、かなり壁を感じているところです。そのため、どうにかして振り向いてもらい、自分が自分以外のところに関心を持ち、自分以外の人にどうにか伝播していくということが増えていけば、いわゆる共生に近づいていくのではないかなと思います。

⁹ 以下、パネリスト、会場質疑応答での応答者は苗字表記とする。

す。具体的ではなくて、申しわけないです。

■佐藤：他にはいかがでしょうか。

■宇都宮：私も、共に生きるってなんだろうかと
うと、考えてしまいます。そして、この提題をよく
現場の先生から受けてたりもします。提題では、個人
の能力に焦点が当てられがちかと思えます。例えば
ある人がこうやらなければいけない、こう感じな
ければいけない、こういう能力とか資質を持たな
ければいけないという話しです。具体的には、もう少
し、自分がもう少し寛容にならなくてはいけないと
いうようなものです。そういった個人の能力に焦点
化していくと、結局、誰かの責任になるのではない
でしょうか。共に生きるには、あの人がやらなけれ
ばいけない、自分がやらなければいけないという形
になってしまうのです。そのため、学校の先生にこ
のような資質能力を身につけてくださいと私の口か
らはとても言えないというのが、ずっと研究してき
て思ったことです。

確かに、社会を作っているのは個人個人の集まり
ではあります。そのため、自分が社会の中に所属し
ている一員として、社会を作っていくのは自分だ
という感覚を持っていくことが重要です。本当に難し
いと思います。そして、なるべく個人の能力や資
質に焦点化させずに、環境、空間、教室を良くして
いく視点を取り入れるということをしていくと、共
に生きることに繋がっていくのではないかなと最近
思います。具体的にどうしたら良いかっていうの
は、私には全くアイデアはありません。もし、あれ
ば教えていただきたいというのが今の私の考えで
す。

■山西：私の捉え方にはもともと開発教育からの影
響があります。30 数年前から日本の中で開発教育
の動きが起こった時も、やはり一番のきっかけは南
北の格差や国際平和、国内の格差でした。特に飽食
と飢餓の問題に関しては、特に 80 年代、世界中に
大きな議論が起きました。そのプロセスとして開発

教育活動が世の中で動いていくということは、共に
生きてないよねっていうのは既に前提なのです。日
本における、先進国における人間は、非常に物的に
豊かになっています。けれども、その社会構造は一
方では貧困という問題を、構造的につくり出してし
まっているのです。その中であぐらをかいていてい
いのかというところから、その構造をどう読み解い
ていくのかというところから、開発教育活動は起き
ています。それは地域の問題にも、同じことが言え
るかと思えます。例えば、外国人が日本の中に入っ
てくる中で、本質的な構造を解決しないで、日本に
やってきた外国人だけの問題に目を向けていたら、
いつになっても場当たりの対応になるのではない
でしょうか。そして一方では、その構造が国内にお
ける格差も作り出しているのです。最近では、子ど
もの貧困の問題など色々な問題があります。やはり
そこをしっかりと見ていくと、私たちは今この地球上
において誰も共に生きていない状況にあるのです。
だからその状況を変えていこうじゃないかという
ところから、共に生きるということがあり、その中に
多文化共生をどう位置づけるかという議論ができ
るかと思自身は思います。

■南浦：山西先生は大きな点を語ってくださいま
したので、私はすごくミクロな話をします。私はさ
っき言ったように教員養成の話をしております。1 学
年に 30 人くらい学生がいます。高校を卒業して、
大学1年生に入ってきた学生ですが、本当にいろん
な人がいます。最初は高校生に毛の生えたような感
じで、いろんなグループがあります。そして段々、
あの人は嫌だの、この人が嫌だのと出てきます。け
れども最終的には、30 人が全員で上手く卒業する
方向に、できれば教員養成なので、学校の先生にな
ると、向かって行ってほしいという気持ちがありま
す。その時に出てくるのが、嫌なやつなのだけど、
嫌なやつでも一緒にやっぴいかなきゃいけないとい
った考えです。私は皆を好きにならなきゃいけない

ということと、共に生きるっていうことは一緒ではないのだと思います。だから、共に生きる中で、そのうち嫌なやつじゃなくなっていくってのは当然あるわけです。このような部分を考えていかなければいけないのかなと思います。

一緒に生きる、やっていくことと、好き嫌いというのは別の問題ではないでしょうか。このところを考えていかないと、なかなか共に生きるのはなかなか難しいのではないかと思います。好き嫌いでストップしてしまって、進んでいかない。実は例えば、外国人、国際的な問題や境界的な問題だけに限ったことではありません。実は私たちの周りの中にもかなりあるのではないのでしょうか。例えば、職場の問題であったり友達の問題であったりするかと思います。

■佐藤：共に生きるっていうことをどう考えるかで、多文化共生の実現をどうするかっていうことに非常に関わっていると思います。ヤンさんが最初のご発表で、既に現実が多文化だというデータを提示してくれました。もしヤンさんの予稿集にあるように猫と一緒にいるから共に生きているということであれば、もう多文化であり共に生きているため、どうして今さら多文化共生をしなくてはいけないのかという発想が出てもおかしくありません。

この際、多文化や共に生きることをどういうふうに捉えるかで、多文化共生をどうやって実現していくのが変わるのではないかと思います。

関連して、宇都宮さんだっと思います。文化・社会を作っていく個人という視点で、そこをどう意識化させていくかという点も、教育に何ができるのかという問いに対して重要かと思います。また、最後の山西さんのご発表でも、文化は作られる、誰が作るのかという発想に立った時に、社会文化を作っているのは個人であることを、どう実際に教育実践で意識化させていけるかということが触れられていました。うろ覚えですが、南浦さんの予稿

集の問題に書いてあったようなことかと思います。私も意識化に関してはいつも難しさを感じています。もうそういうことを言わなくても意識化している学生もいれば、意識化させようと頑張ったばかりに全然違った方向に行く学生もいます。

これ実は最初にお話した、クリティカルな視点と同じことがいえるかと思います。最初、社会・文化といった理論を勉強している時に、頭の中では、個々人の一つ一つの行動が社会とか文化とか大きい物を作っていることは分かるのです。しかし、「うーん、まあ自分一人がしてもしなくてもそう変わらないのではないかな」と考えてしまうことも多いのではないかと思います。ただ今回アメリカのある選挙で、どこかの街では1票差で候補者のどちらが選ばれるかが決まったという事態が起こったそうです。このような例はかなり特殊な例かもしれませんが、個々人の一つ一つの行動が社会を作っているのだということが頭でなく体で分かる、それをクリックする瞬間のような、意識化をどうさせていくかという点についてはいかがでしょうか。また、もしあれば実践で上手くいった例、いかなかった例を聴かせていただけないでしょうか。

■山西：今、まさしくその文化、社会をどうつくるかについては先程私がお話したかと思います。問題解決のプロセスが一番であり、その問題解決の必要性がないと誰もやる気にならないので、自分の生活に直接リンクさせなければいけないというお話はさっきしました。それと、今日の午前中から行われていた芸術、アートのフォーラムに私はいました。この問題解決と必然性において、芸術、アートの可能性は、非常に大きいです。どうしても認識からだけ入ってしまうと難しい。いくら認識を含めたからといって、人間がそのプロセスの中で行動に移すかどうかはわかりません。開発教育や国際理解教育では、常に知り考え行動することを標榜しながら、知り考えるまで到達しても、なかなか行動にいたら

いことがあります。知って考えたからといって、人間は行動するかというところでもありません。時には、非常に感覚的な動きの中で、感じた瞬間にワッと行動している場合もあります。情動に流される怖さを持ちながらも、認識と感覚っていうのは相まって人間全体を作っているわけですから、そこをしっかりとみていく必要があります。アートのアプローチは、認識と感覚の両方を交錯させるところに面白さがあります。そういったアプローチをとる中で、自然とそういう行動に繋がっていくプロセスが生み出されていくのではないのでしょうか。

例えば、この1年間、地域でのアートフェスティバルが全国各地で行われていて、多くの若者からお年寄りたちが、地域づくりに向けたアートフェスティバルに参加しています。たとえばこの3月には瀬戸内国際芸術祭が開催されますが、私もいくつかの島を巡ってくる予定にしていますが、ああいったアートを通して多くの人が地域に入り込んでいく中で、地域が抱えている問題をみんなで協働して解決していくプロセスが生まれていく。私はこういった活動を学習プログラムとして捉えていくことが大切だと思っています。

■南浦：今の山西先生のお話でなるほどと思った部分がありました。最初、私の実践例のところ、留学生と日本人の社会科を学びたい学生で色々議論した時があったかと思っています。今年ではなく去年の授業で、ああいうお題でいろいろやっていると、非常に学生たちが硬直していく時がありました。クリエイティブに物事を考えていく際、なぜとかどうしてっていうことばで考えていくと、実は、現状の問題の経緯であったり原因であったり、現状の分析っていう方向に入っていきます。そうすると問題が深く見えてきてしまい、「これからを実は、どう考えていくか」という点が見えなくなってきました。それで、当時留学生センターと一緒にやっていた先生と私たちが図書館で「ずーん」となって、どうしたらいい

かとずっと話をしていました。その時、ぼんとでてきたのが、「私たちの、これからの辞書」っていうのを作るということです。様々な概念的なことば、例えば愛国心などの言葉を、これからどういうことばの意味に切り替えていったらいいのか、留学生と一緒に考え、新しい辞書を一緒に作る活動をしました。そして本にして、地域の本屋さんなどに置かせてもらったことがあります。最後のところは非常にアートの部分があるかなと思っています。

どうしても一緒に考えることは、面白いのだけでもすごくしんどい作業でもあります。そういう意味では、社会科教育でも国際理解教育でも同じでした。理念的に物事を理性で考えていくことは重要な事だけれども、とてもしんどいことです。その時にやはり、ひとつ共に何かをすることが大切です。さっきの言い方はどうかと思うのですが、嫌なやつで分かり合えないけど一緒にやっついていかないといけないことは大事だと思います。やっぱり具体的に何か一緒にやることや一緒にするという作業を伴うことはすごく大事です。その作業のときにアートという考え方はひとつのきっかけ、ひとつのブレイクスルーの部分があるのかもしれないと、私の実感として思っています。そこから理性にもう一回帰って行ってほしいなと思うのですが。

■宇都宮：私も先ほどの南浦先生、山西先生のお話で感じるがありました。お話の中で出てきたキーワードでプロセスがありました。やはり、何か物事をなそうと思ったらやっぱり目標があって、それに向けて議論しなければいけません。例えば何か、問題があった時に、原因は何かと考えがちになります。そこでは、いわゆるその原因とか結果という一次元の話に焦点化されてしまいます。考え始めるとそれこそ堂々巡りで、なかなかまい解決方法に至らないことも多いです。もし、すごく難しいという困難性があるのだとしたら、もう少しプロセス、過程、変わっていく様子にどっぷり浸かって、それを

一緒に味わっていく。多分、一緒のところにいる人は、同じ空間を共有している、同じ時間のタイムラインにいるといえます。その同時性だったり同空間性だったりするところをもう少し、お互いに認識する、感じる点をやっていくことがいいのかと、感じました。

私が接してきた実践例などを見ますと、学校でも教室でも、すごくいい雰囲気だと感じるところは、すごくプロセスを大事にしています。例えば、授業中にお話しても悪さをして、何かその子が学んでいるって側面が見られたら、そこを最大限に評価している雰囲気がありました。他には、休み時間だったら黙っていないでどんどん活発におしゃべりしてもいいんだという寛容的なところがあります。それも寛容になりなさいとか、目標を決めて向かっていくとかではなく、プロセスに縦に見ていくことや一緒に生活していくことへの意識が、よく見られるように思います。

■佐藤：そうですね、クリティカルに深く考えることと、一緒に何かすることのバランスについて共感するところがあります。実は先ほどの南浦さんの発表では、観を鍛えることをあまり重視過ぎると重くて「ずーん」と沈んで、最後盛り上がるはずだったのに、結局最後は無くなって沈んだままだったってお話もありました。そこからは、実際に体を動かして一緒にになにかやっていくことが重要であると考えられます。その際に山西さんがおっしゃっていた、どう必然性を絡ませていくのかが、これからいろんな実践を考える上でのすごくキーになるかと思えます。

もう一つ、すごくアートが出てきました。山西さんの予稿集の中に書いてあったかと思うのですが、ことばの教育に携わるものが言葉をどう捉えるかは、すごく大切なことです。私も今ちょっとそれで論文を書かなければならず、すごく苦しいところです。ことばの教育に携わるものとして、ことばをど

う捉えているかは、すごく大切なことだと思います。私も最初にお話しましたが、日本語だけで話しましょうということ、全然開かれていないことになっていると感じてはいます。その際、ことばという一つの表現について、アートとか、音楽とか表現の手段の一つという定義がいいのかは分かりませんが、どの部分までどう含めるかということを考える上では、いろんな分野がすごく参考になるかと思えます。

今回、ことばの教育にどっぷりつかっていない方々に来ていただいたりもしていますので、そういう方から学べることが多いかと思えます。また、私は、幼児教育とか、障害者の方の教育などからも学べる場所があるのではないかと考えています。

で、次に、宇都宮さんのご発表の中で、寛容性についてかなりおっしゃられていました。寛容性があるところでは上手く言っているけれども、どういう寛容性を、どうして寛容性を持つようになったか、どうしてそのようなコミュニティになったのかは、わからないし、知りたいと思いますと仰っていましたよね。それに関してなにかコメントですとか、こんなことがあったよってということはいかがでしょうか。

■宇都宮：本当に先ほどのディスカッションにも繋がると思いますが、寛容になりなさいってよく多文化共生で言われますよね。私たちが共生していくためにはほんとに人の意見を認めて、寛容になりなさいと言われます。しかし、実際に寛容になれない場合は、どうしたらいいのでしょうかという問いに返ってきてしまいます。結局、寛容に対し、どうしたらいいかと考え始めると、どうどう巡りになってしまいます。なので、例えば、ダイレクトに寛容になりなさいという以外に、心が豊かになる、違いが分かるようになる方法がもしあれば、私が知りたいなっていうのが私の問いかけではあります。

■佐藤：もっと言えば、そういう方法があるのかっ

ていうことになりますが、いかがでしょうか。皆さんは寛容性がお有りですか？ YES, NO？

■南浦：うちの学生に対し、コースの主任が時々言っていることがあります。ちょっとマッチョだなと思いつつながら、なるほどなと思うことがあるのです。私はこれが嫌いですか、僕はこれが苦手ですか、学生が特に、1年生のころに、2年生とか最初の頃によく言うんですね。そのときに、主任が言っていることばでなるほどなというのがあります。

「嫌いなものでもまずは食べてみて、味わって、一回飲み込んでみて、どういう味がしてどういう栄養があるのかをまず一回食べてみなさい。それからやっぱりダメだなと思ったら、それから食べなくてもいいけど。まずは一回食べて見るっていうことをやらないと人間は、その栄養を取ることはできないし、成長もできない」

これを聞くと、おーなるほど、でもマッチョだなといつも思っています（笑）。

寛容に関して、ひょっとすると実はまず試すということがなかなか難しいのかもしれない。勇気のように、あるいは一回口にしてみないといけない部分がある、寛容に至る前に実はあるのかもしれないと思いました。すごく抽象的ですが。僕も、わりと人間に好き嫌いがあつたりするほうですけど、でもできるだけ、苦手な人、この人とは話が合わないなという人こそ、気になって話しかけてみたりするというのは、確かに大事なことだと思っています。昨日、たくさん佐藤さんに話しかけたのはそういう意味じゃないんですけど。

■佐藤：でも私も、ちょっと苦手だなと思う人ほど意識して関わるといふ点は同じです。それと今の話を、私はマッチョだなんて思うよりも母親父親がとりあえず食べてみなさいっていうのを思い浮かべていました。そのため、あまりマッチョっていう意識は持ちませんでした。寛容性に関しては、先ほど山西先生が必然性と仰っていましたので、必然性と寛

容性についていかがでしょうか。

■山西：私は今日は必然性で攻めるって決めました。必然性という視点から、寛容をみたいと思います。その場合、教室空間や地域におけるコミュニティに寛容性が必要なければ、寛容性は必要ないと私は平気で言ってしまう。だって、そこで皆が上手く生きているならば、無理して寛容性を押し付ける必要はありませんから。

ただその集団の中で、いろんな立場が対立し、どうにかしなくてはいけないときに、初めて自分が当事者としてその問題にアクセスしなければいけない。その場で起こるなんらかのしがらみを受け入れるためには寛容性、受容性が必要になってくる。必然性からみるとこのように捉えられます。これは小さなコミュニティでもそうですが、今、世界的にあまりにもグローバルイシューが起きており、様々な問題をまだ誰も解決できていません。そうするといろんな問題に対する捉え方から、私たちはどう学ぶかっていうのが今すごく必要な状態です。いろんな動きに対して、自分を開いていくこと。これは大きな意味で、今後、地球で人類がどう生きていくかという意味で非常に必然性があることだと思っています。そういう立場で考えると、世界的にいろんな文化が生み出されてきているのです。先ほどお話したように、文化は世界中で皆が生きていくために、蓄積して創り出されてきた必然性のあるものであったわけです。それが今、急激に変わっていく中で、さらに様々なものをもう一度学びあうプロセスを私たちは大切にしていきたい。そのためには多様な文化に対しても、寛容になったほうがそれを活かせるのではないかというスタンスで、いかがでしょうか。必然性で攻めてみました。

■佐藤：寛容性、自分を開くということばがありましたけど、それに関してはいかがでしょうか。

■ヤン：私は教歴が短いので、皆さまにお聞きしたいのですが、自分を開くとか、寛容性を持つといった

ことを、18, 19 歳くらいの人に言っても、通じないということを感じます。「こういうのもあるよ」と、いろんな世界を見せても、自分事にならない理由が1つあります。それは、知っても知らなくても今の自分の毎日はあまり変わらないからです。世の中で起きている様々なことに対して、今より知ろうとする人と知ろうとしない人は絶対います。それが分かったところでどんな意味があるのという人たちを、いかに振り向かせていくかという課題です。その作業がすごく難しいなと感じていますが、みなさんはどういうふうに解決なさっているのでしょうか。

■佐藤：これも必然性の問題でしょうか。

■山西：そういう質問って私は面白いと思ってしまいます。私は正直言うと、先ほどお話ししたように地域などいろんな場での教育づくりとか、学びづくりを意識しています。恐らく学校的空間ならではの難しさは、そこにあるかと思います。学校空間では先に学びの場があり、その中で何らかのカリキュラムなどを作り、プログラムが動いていきます。そのため、子どもたちにとって生活課題があるというより、学んだことがいずれ生活課題に繋がるといいよねと、みんな働きかけています。ですので、なかなか必然性に入り込めない。しかし生活の中における学びや、学びから生まれてくる教育というのは、最初に生活の課題とか必然性があり、生きていくためには課題に対してもっと学ばなくてはいけないのです。もっと学ぶためには、周りの人間の働きかけ、教育が必要になってきます。

本来生活の中にはいろんな活動とそれに伴う学びがあって、それに対して、様々な働きかけや教育がなされています。例えば、市民運動型の活動とか、地域社会づくりに向けた活動にみる学びと教育は、まさしく必然性から動いています。ですから自分の生活と関係ないという発想がない。学校という制度に組み込まれた教育や学びと、生活の中で生み出さ

れている学びや教育をどうつなげていくのかを常に認識、意識していくことは重要だと思います。教員はどうしても制度的なものをみますが、子どもたちは生活の中にある学びを持っているわけです。ですが、学校的空間の中の学びは、生活に関係ない学びだと思っているため、自分の中で切り分けてしまっているケースもたくさんあります。そこをどう繋げるかというのは非常に大きな課題です。ですが、地域日本語教育では、生活課題がまず先にあるわけですから、生活の中にどういう学びをつくるかは、地域日本語教育では重要ですし、またそれはそれほど難しいことではないと思っています。以上です。

■佐藤：私も少し思い出したことをお話しします。私が最初、自己紹介をしているときに少し説明が切れていたのです。クリティカル、愛情がない、あると言った後にする予定だった話です。

この大会の問題意識「多文化共生と向きあう」を考えたのは神吉さんです。私が最初、ヘイトスピーチの問題や政治家やいろんな方の暴言や失言が、そのまま通ってしまう社会とはという問題と、ことばの教育の関係を非常に考えていた時でした。何を切り口にすれば、言語文化教育実践とその研究を通してどういう社会を作っていきたいのかいうことを、学会にいらっしゃる幅広い関心を持つ皆さんが興味を持って議論に参加してくださるのだろうかと考えていました。それなら、多文化共生を切り口にしてみたらという話が出てきました。ですので、それぞれの方の多文化共生観を通して、どういう教育実践をしていきたいのか、どういう社会を作っていきたいのかというお話も、シンポジウムの中であったかと思います。

ただこのシンポジウム、本大会の最後にあたりますので、次は来場の皆さんにも考えていただきたいのです。

ただその前に、ディスカッションのポイントを整理しておきたいと思っています。最初の私の自己紹介の

際、教育に何が出来るのかという課題として、5つが挙げられていました。

1. 国の政策への提言
2. 個人の意識にどう働きかけるか
3. メディアとどうか変わるか
4. 積み重なっている多文化共生推進の理念、掛け声などをどう共有し有効活用していくか
5. 実際のプランとことばの教育がどうかかわるか

以上のことを考えつつ、「あなたにとっての多文化共生実現のために、何か取り組みを行っていますか」ということを話し合っていたきたいのです。自己紹介を交え、あなたにとっての多文化共生とは何か、どうして多文化共生が大切なのか、大切じゃないのかを、3名くらいで15分位お話いただければと思います。その後、全体でディスカッション内容を共有することで、シンポジストの方々や会場みなさんと意見交換をできればと思っています。よろしくお願い致します。

3. 会場質疑応答

3. 1. 質疑応答 1

■小畑（会場）¹⁰：私は、日本語学校で長く働いていました。その学校では、教員が教室だけで多文化共生を扱わずとも、学生の生活全般の状況が見える、つまり多文化共生の現状が目の前に見えるような状況でした。なので、学生の外で起こったトラブルなどの相談が直接に学校にやってきます。そして、他の学生もトラブルについて、知る機会もありました。教育実践としてではなく、本当に必然的に、多文化共生の課題に対して取り組まざるを得ないような状況が起こっていました。例えば、学生寮

に住んでいる学生の話です。その学生寮は1つのアパートの何部屋かを学校が借り上げているところです。そうすると、「料理の匂いが嫌だ、臭いが気になるからどうにかしてほしい」といった苦情が近隣住民から学校に来るわけです。そのため、学校と寮に住んでいる学生と近隣住民の方と、互いがどう生活を続けていくかと、折り合いをつけるための話し合いを重ねてきました。このような必然性のある課題に対して話し合う過程こそが多文化共生だと私は認識しています。文化観といった抽象的な概念も重要なことは分かるのですが、ここで起きている課題は、南浦先生がおっしゃった好嫌の問題、臭いとかそういうような生理的なことに近い課題です。課題に対し、話し合う中で、自分は何が好きで何が嫌なのか、相手は何を嫌だと言っているのかをわかっていく、知り合っていく。それこそが共生の道なのかなとそういう話をしました。

■古屋（会場）¹¹：同じグループから補足で説明致します。要するに、現場経験上、共生が大事なのも分かるし、個々でどう違うのかを理解し合う寛容性もわかる。しかし、実際生活の中で起こっているトラブルこそが、多文化共生の最前線なわけです。例えば教室で多文化共生に関し考えることが、実際に起きているトラブルを解決することと、どう繋がるのかわからないというお話でした。結局多文化共生の問題とは、具体的に問題が起こって、どう解決していくかという問題でもあります。共生に向けて教室内で行う実践と、実際に起きている共生に関するトラブルとの繋がりなどをもう少しお話を聞いてみたいという結論に至りました。

■佐藤：シンポジストの方、いかがでしょうか。

■南浦：すごく分かります。今日のシンポジウムの中でも、教育の実践という意味にも様々な意味がありました。授業、地域といっても一概に言えませ

¹⁰ 小畑美奈恵（早稲田大学）。

¹¹ 古屋憲章（早稲田大学）。

ん。例えば今のお話のように、現実のトラブルと教室の実践とを考えた時に、いつも思うことがあります。ダイレクトに理念だけの話をするのもよくありません。けれども、あなたのアパートの匂い問題と具体的にある人に密接した問題になっても実は、重苦しいというものでもあります。具体だからいいという問題でもないと思うのです。

具体的な話だけど、ちょっと自分たちの話とずれた話、ちょっと違う話をしてみることです。例えば、私が話し合う授業を行う時、テーマとして意識しているのはその点です。皆がそれなりにちょっと楽しみながら話せるけど、少し考えるとどうも自分のアパートの話繋がっているなど、意識できるようになっていくことが大事かと思います。学んでいく内容をダイレクトに課題とするよりは、教室でやるときは、少しずつ試してみる。考えていくと自分のあの問題に繋がったというものになるといいのかなと思いました。

■佐藤：繋げ方もありますよね、具体から始まっていくということなど。繋がるきっかけは、人によって違っていると思います。これも一種の必然性でしょうか。偶然と必然とは難しい問題です。他にこういったことをシェアしてみたい方、どうぞ。

3. 2. 質疑応答 2

■毛利（会場）¹²：貴重なお話ありがとうございました。毛利と申します。子どもたちを対象にした日本語のボランティア活動をしています。今日のシンポジウムにおける小グループでの意見交換時に、横浜の先生方とお話する機会がありました。その場では実際の子どもたちがこんなことで困っている、悩んでいるというものです。このような課題への対処方法について意見交換を致しました。

対処方法の一つとして、教室活動と教育の現場が

一体となり、その中から新しい文化を作っていくというプロセスがあっていいのではと思っています。そのためのネットワーク作りをどうやっていったらいいのか、その処方箋についてお伺いできればと思います。また、話しの中で、必然性ってということばが出ています。「必然性」は、教育の現場から見ると「必要性」だと思います。ことばがあって人があるのではなく、人による必要性の中で、ことばがあり、使われると考えるのです。私も全くそのとおりだと思います。子どもたちにとっての必要性が、教室とその実社会を繋ぐ糸、きっかけになるのではないと思います。このつなぎ方について、アドバイスを頂ければと思います。

■佐藤：いかがでしょうか。

■山西：私の考えですが、教室における実践がどれだけ可能性を持っているのか、これはなかなかここまでだと限定させるのが非常に難しいものです。教室は非常に多くの可能性を持っています。かつて里見実さんと話をしていたときに、かつての生活綴り方などの実践を見ると教室は捨てたものじゃない。歴史的に振り返りながら、学校教育は非常に大きな可能性を持っているっていうことを、彼はとうとうと語ってくれました。改めて、教室って大きな可能性を持っていると思いました。多くの子ども達が貧困の問題を抱えながらもリアリティを持って生活を読み解く実践をかつてはつくり出してきたのです。そういう一つの可能性はある。

ただ、今の状況の中で考えるときに、私は学校を含む地域でどういう学びの循環を創るかっていう言い方をしています。学校と地域を繋ぐと言った瞬間に、軸は学校であると捉えられます。学校教育を補完するものとして地域と繋ぐという語り方が非常に多いです。学校を含む地域でという言い方は、地域をまず軸にしています。それは子どもたち学習者が、地域で生活しているからです。まず地域を軸にする。いろんな問題が地域社会の中にはみとれま

¹² 毛利友明（多文化センター東京）。

す。じゃあ、これをどうしたらいいのかというときに、アプローチとしては、本来、家庭教育や社会教育の中でも、公的社会教育や市民活動型の教育と様々な学びが地域の中ではあります。

ただ地域の中にある学びと比べると、学校における学びは、非常に継続的で、ときには非常に系統的で、これは学校以外にはない学びです。そうするとやはり学校の持つひとつの要素もしっかり見た上で、地域全体の中で学びをどうデザインしていったらいいか、それを子どもの発達や学習者の発達によってどう循環させていくか、このような学びのデザインをどうしていくかが、重要だと思っています。

ですから、そうなる今おっしゃったことは完全に繋がってきます。学校の可能性が広がれば広がるほど、繋がりは広がるかと思えます。ただ学校だけが、教室だけが全てをやらなければと思った瞬間に非常にしんどくなります。そのため、全体の中でそれぞれが持つ学びの特性をどう活かしかえるのかというところが大切だと思います。

■毛利(会場)：全く同感ですが、もう少しお互いが全体のデザインの中で、どういう役割を持っているのか演じていく、認め合う、その形が生まれてくれば非常に嬉しいです。

一点おそらく学校と地域と違うと思うのが、実社会では、失敗は許されない点です。例えば実社会の中で、運転手さんとして社会に入りなにかあったとき、それは人の生命に関わります。そういう意味で、失敗は許されない世界といえます。学校は、どちらかという許容範囲が、広いのではないのでしょうか。やっぱり失敗をしながらひとつのプロセスで成長していけるという点です。継続性や傾聴性やデザインの中の中心にある考え方を育てるという意味で非常に大事な場だと私自身を考えています。そういうふうな社会の両輪でやっていけることが恐らく多文化って今日のテーマの中で求められているひとつのプロセスで答えじゃないかなって感じが

したので、取ってそんなお話をしてみました。

4. 終わり

■佐藤：最後に今日のシンポジウムを終えまして、何かありましたらシンポジストの方からあれば一言お願い致します。

■ヤン：ほんとに2時間半あっという間でした。感想ですが、今回のテーマが多文化共生と向きあうってことでしたが、「向きあう」というかその「向きあい方」が鍵になると思いました。でもそれこそがもっともむずかしいことではないかと。実は、私は年末、この短い予稿集ですごく苦しみました、これだったらいっそ実家に帰って休めば良かったと思いました。改めて、日本語教育の立場で多文化共生に関わっている身として、振り返るいい機会が得られたと思っています。また皆さんとお話できればと思います。ありがとうございました。

■南浦：まとめるっていうことがなかなか難しく、まとめられません。最後のシンポジウムで、今までの議論が全部綺麗にまとまったらいいですねって話がありました。しかし、多分こういう話は、難しいですね。確かポスターでも、授業をどうまとめるかというテーマがありましたが。まとめるというよりは、まとめるとはなんだろうかと思えます。多文化共生は何か、僕は今一番わからなくなっています。予稿集を書いている時、大晦日で奥さんの実家でした。そのため、余計にまとまらなくなりました。もう少し考えて、また文章にしたいと思えます。

■宇都宮：私もまとまっています。本日、参加してほんとに素晴らしい学会だと思いました。今会場で行われていたディスカッションの様子も、私が参加している学会には見られない雰囲気です。これはまさに多文化共生を地で行くような学会じゃないかなと思いました。おそらくこれができるのは、皆

さん自身がやはり資質が高いといますか、関心がすごくおありで、いろんな文化を許容されている、そういう心を持った方なのではないでしょうか。

ただちょっと考えまして、そういう方は外の世界と自分を繋いでいる、そんな感覚があります。多分そういうような生き方の人たちが集まると、お互いの情報を交換しても有意義な会、活気のある会になるのだなと思いました。こういったダイナミズムを教育の現場でも活かしていけたらなとこれからの私自身の目標でもありますし、考えていきたいなおもいます。どうもありがとうございました。

■山西：私はさらに1つ課題を出してみようかなと思います。この1年、私のゼミにいる今年の学生たちが創り出したゼミテーマがあります。それは、「祭りを通してみる、風土を活かした地域づくり——共生社会に向けて」です。多文化とかを語っていくときに、文化はどうつくられるかっていう議論は今日もしてきたわけです。それに加え、風土、自然との関わりの中で人間が作り出してきた文化としての風土をもう一度捉え直してみることがすごく必要だと思いました。

社会的関係だけで文化をつくり出しているかという決してそうではありません。常に人間は自然との関わりの中で風土を醸成させて、それがまた社会的関係と連動しています。そして社会的関係における文化というのは非常に流動的です。しかし、自然との関係にある文化は、風土性を持っているため、安定しており、その社会独特の文化をつくり出します。この部分も一緒に見ながら多文化や多文化共生を今後考えていくことが必要だと思います。今まさしく震災から5年立った中で、ある東北のプロジェクトでは津波の持つ文化とは何かを掘り下げながら、これからの地域づくりを議論しようとしています。風土も交えて文化にきちんと目を向けていくということが教育で求められてくると思いますから。このような視点も今後どこかで議論できると面

白いと思っています。ありがとうございました。

■佐藤：私も最後に申し上げます。今回の多文化共生と向きあうっていうテーマにしたのは神吉さんでした。聞いた当初、興味深いテーマだったのですが、実は一歩引いた時がありました。というのは、私自身アメリカに20年近く在住しているからです。多文化共生っていうことば自体が多分日本語だと思います。例えば英語にした時に multicultural coexistence っていうのはありえないことです。そのため、多文化共生を扱うということは日本で何が起こっているかということ、20年間日本に住んでいない人間はかなりさらわなくてははいけません。そういった人間が司会を務めるということはどういうことなのかを非常に考えました。実際引き受けないという選択肢はなかったのですが、一歩引いた時がありました。そのため、ずっと「同じ」「違う」というのはどういう状態なのかを私自身はずっと考えていましたし、今回もまたお話を聞く中でいろいろ勉強させていただきました。

その中で、もう同じとか違うとか考えなくてもいいのではないかと思うようになってきました。同じと思えば同じだし、違うと思えば違うからです。それよりも目の前にいる人たちに、私はあなたのことを、すごく気にかけている、興味を持っている、愛情を持っている、それでいいと思います。学生にしても、隣に住んでいる人でも、愛情を持って接しているよ。だから、その人が違うか、同じかということは理論上では必要ですが、実際はどちらでもいいのかなという感じがすごくしています。

それともう一つは先程も出た連携の話です。連携という話になればなるほど、これからどういう地域や社会を作っていきたいのかっていうビジョンが共有されていないといけなさと感じました。連携しなければいけないからするといったような形での連携は上手く行かないだろうなって感じています。やはりどういう社会を作っていきたいのかということ

の擦り合わせは難しいにしろ、一人一人が考えていかなければいけないと、またさらに今回痛感しました。今回はこのような機会をありがとうございます。それでは、これでシンポジウム2を終えさせていただきます。

文献

- 庵功雄（代表）（2015）. 作成した文章を診断する Ver0.23y——やさ日チェッカー文章診断版（一般向け）『やさしい日本語』. <http://www4414uj.sakura.ne.jp/Yasanichi1/nsindan/>
- 群馬県（2012）. 『群馬県多文化共生推進指針（改訂版）』. <http://www.pref.gunma.jp/04/c1500176.html>
- 佐藤慎司，高見智子，神吉宇一，熊谷由理（編）（2016）. 『未来を創ることばの教育をめざして——内容重視の批判的言語教育（Critical Content-Based Instruction）の理論と実践』 ココ出版.
- 総務省（2006）. 『地域における多文化共生推進プラン』. http://www.soumu.go.jp/main_content/000400764.pdf
- ヒューマンライブラリー（2014年6月24日10:45, UTC）. 『ウィキペディア日本語版』. <https://ja.wikipedia.org/wiki/ヒューマンライブラリー>
- 山西優二（代表）（2014）. 『多言語・多文化教材研究』. <http://www.waseda.jp/prj-tagengo2013/>
- 山西優二（2016）. 多文化共生とことばの教育『言語文化教育研究会第2回年次大会予稿集』（pp. 47-59）. http://alce.jp/annual/proceedings2015_all.pdf
- ヤン・ジョンヨン（2016）. 多文化共生と教育『言語文化教育研究会第2回年次大会予稿集』（pp. 28-32）. http://alce.jp/annual/proceedings2015_all.pdf

【実施要領】

- 言語文化教育研究会第2回年次大会（大会テーマ：「多文化共生」と向きあう）[シンポジウム2]「多文化共生」と多様性——教育に何ができるのか
- ・開催日：2016年3月13日（日）13:00～15:30
 - ・会場：武蔵野美術大学 鷹の台キャンパス

【シンポジスト】

■宇都宮 裕章（うつのみや・ひろあき）——教育言語学。学生の時から学校現場での日本語教育にかかわってきた縁で、言語教育の問題に取り組み始める。共立女子大学，横浜国立大学を経て，現在は静岡大学大学院教育学領域に所属。2003年にブリテイツュコロンビア大学へ研修留学した際，教育言語学の捉え方に感銘を受け，以降学校教員との協働で理論と実践をつなぐ研究を行っている。主著は『教育言語学論考』，『生態学が教育を変える』（訳），『新ことば教育論』など。

■南浦 涼介（みなみうら・りょうすけ）——教育学。滋賀大学教育学部卒業後，タイで日本語教師をし，帰国後小中高等学校の講師（主に社会科，外国人児童生徒の日本語指導）をする。広島大学大学院教育学研究科修了博士（教育学）。その後山口大学教育学部で小学校全般，および小中学校の社会科教育の教員養成をする。2016年4月から東京学芸大学で日本語教育学分野を中心とした学校教員養成をしている。「社会とことば，文化」の視点から，私たちの現状を捉えなおし，新しいものを創りだす教育実践を行おうと鋭意努力中。

■山西 優二（やまにし・ゆうじ）——開発教育・国際理解教育。神戸大学経済学部を卒業後，商社に勤務し，退職後アメリカへ留学し，アジア各国を放浪する。帰国後1980年代より，開発教育・人権教育・国際理解教育などの活動に，NGO・地域・大学の立場から参加している。現職は，早稲田大学文学学術院教授，かながわ開発教育センター代表，日

本国際理解教育学会理事，逗子市教育委員会教育委員，逗子市社会福祉協議会福祉教育チーム委員など。「平和・公正・共生」の文化づくりに向けた，地域の風土やアートを活かした教育づくり・学びづくりに関心を持っている。

■ヤン ジョンヨン（やん・じょんよん）——韓国・ソウル市出身。1999年に来日。日本語学校で日本語を学び，その後，大学・大学院で言語学・日本語教育を研究する。埼玉大学大学院文化科学研究科日本・アジア研究専攻修了。修士（文化科学）。博士後期課程単位取得退学。2005年より，群馬県内の公立小学校・外国人学校・地域日本語教室・大学などで日本語教育に携わる。現在は，群馬県立女子大学地域日本語教育センターで日本語教員養成・教材開発・生活者としての外国人への日本語学習支援を行っている。

【コーディネーター・司会】

■佐藤 慎司（さとう・しんじ）——コロンビア大学ティーチャーズカレッジ博士課程修了 Ph.D.（教育人類学）。ハーバード大学，コロンビア大学日本語講師などを経て，現在プリンストン大学東アジア研究学部日本語プログラムディレクター／主任講師。研究テーマは，ことばの教育における自明の事柄の見直し，それを乗り越える実践の模索など。主要共著書に『文化，ことば，教育』，『社会参加をめざす日本語教育』，『異文化コミュニケーション再考』，『未来を創ることばの教育をめざして——内容重視の批判的日本語教育（Critical Content-Based Instruction）』，*Rethinking Language and Culture in Japanese Education* などがある。